

水循環に高い関心

シンポに
300人

浅野教授が基調講演

国土交通省国土技術政策
総合研究所、土木研究所、
大阪府下水道技術センタ
ー、大阪市下水道技術協会



熱心に耳を傾ける出席者ら

の四団体主催の「水循環の計画と設計」シンポジウムが16日、大阪府中央区のプリムロス大阪で開催された。タイムリーなテーマだけに行政関係者ら約300名が詰めかけ、立ち見が出るほどの盛況をみせた。

基調講演はカリフォルニア大学名誉教授・土木研究所フェローの浅野孝氏が「持続可能な水資源としての処理水再利用」、東京大学大学院工学科教授・国際水学会副会長の大垣眞一郎氏は「水循環をめぐる諸課題」をテーマに、地球温暖化によって起こり得るシナリオ、水再利用の促進要因、水循環系・水資源の脆弱性

等を指摘し、「総合的な地域に基づいた水資源計画」「地域循環による水再利用システム」「化学技術開発の促進」「リスクの合意形成手法」の重要性を説いた。

つづいて行われたパネルディスカッションは、コーディネーターに国土技術政策総合研究所下水道研究部長の藤木修氏、パネラーに北海道大学大学院工学研究科教授の船水尚行氏、京都大学大学院工学研究科教授の田中宏明氏、クローバルウォーター・ジャパンGWJ代表の吉村和就氏、大阪府下水道課計画グループ長の小林保氏の四氏が顔を揃え、水循環の中のサニテーション施設の役割、開発途上国での水をめぐる衛生状態、さらには都市における水の再利用、再利用に関わるリスクマネジメントな

ど水循環をめぐる意見交換を行った。

会場との質疑応答のなかで田中教授は、環境ホルモンをはじめ微量有害物質の問題について「環境ホルモンの基礎的データが出てきており、世界的にも基礎研究がすすみつつある。女性ホルモンだけでなく他にもあることが分かり、人間の健康への影響についてこれから解明されてゆくだろう」。

また「水道原水中の残留医薬品の問題については発生源で集める方法、あるいは膜やオゾンで除去する方法があるが、殺菌作用のある洗剤を水洗トイレ等から下水道に流すと下水処理に悪影響を与えることも知っておいていただきたい」などと述べた。